

『古事記』雄略天皇条の構成

——若日下部王と赤猪子の伝承を起点に——

鳥谷知子

はじめに

雄略記は次のような内容によって構成されている。

- (A) 日下に坐す若日下部王への求婚
 - (B) 三輪の引田部赤猪子への求婚とその結末
 - (C) 吉野の童女との結婚
 - (D) 吉野の阿岐豆野における狩獵
 - (E) 葛城山での大猪との遭遇
 - (F) 葛城山での一言主大神との遭遇
 - (G) 春日の袁杼比売への求婚
 - (H) 新嘗豊樂における三重の姦の献歌、若日下部王の勸酒歌、天皇の御歌
(天語歌三首)
 - (I) 天皇と袁杼比売の唱和
- これらの説話は、二話一連の構成をもつことが指摘されている。^①(A)(B)は、(B)の伝承中の志都歌の一首の「日下江の 入江の蓮 花蓮 身の盛り人」(記九四番)を若日下部王の比喩と捉えると、若日下部王への求婚とその成立というテーマをもつ。(C)(D)は吉野を舞台にしており、青木周平はこの配

列には「古事記の編者による独自の雄略天皇像造形の意図」があり、「『呉床』という語をキーワードとして挙げることができよう。」^③と指摘する。(E)(F)は葛城山を舞台にしている。長野一雄は(E)(F)の関係を、「一話で葛城山の神を冒とくして失敗した天皇が、二話ではその神に畏敬の念を表して山入りし、逆に神の敬意を受けて両者が宥和した有り様を語る説話」^④とする。また中村啓信は、「大猪が神の化した姿か、神使のそれを明らかにしないまま、天皇は激しい抵抗を受けたのであるから、天皇は再度葛城山に登幸することとなる。めざす相手、服従させるべき神は当然葛城山の神であり、大猪の説話は一言主大神の説話へと連繋して一つの物語に成長する。」^⑤と指摘する。二話は、天皇の葛城山の祭政掌握の過程を説く意図で結びついているだろう。(G)は袁杼比売への求婚と比売の遁走が語られ、その結末が(I)で示される。また(H)と(I)は豊樂をテーマに結びつく。榎本福寿は二話一連の構成原理の中には、(A・B)(H・三重姦・若日下部王・雄略天皇の歌謡)——高光る日の御子、(D)(E)(I・袁杼比売の歌謡)——やすみしし吾が大君、の二つの系統の流れがある、と指摘する。雄略記の記述は、雄略記の記述と異なり「怒れる天皇像」を強く打ち出してはいない。怒れる姿の片鱗を見せる志幾の大県主との問答、一言主神との遭遇や三重の姦

の伝承でも、大県主の謝罪を受け入れ、一言主の名のりによって神に敬意を示し、嫁の歌の善言によって罪を許すという展開になっている。また、安康記には童男として登場し、皇位継承有資格者を次々に殺して勝利者となる残虐性が描かれるが、即位後の雄略記にはそれが描かれないことも特徴である。雄略記の舞台になるのは、日下、三輪、吉野、葛城、春日であり、物語は都が置かれた長谷でしめくられる。いずれも巡幸と求婚伝承が中心であり、古代の天皇家に重要視された土地が選ばれている。(A) (I)において、二話一連の構成をもつ説話の最初と最後に登場するのが、大后若日下部王である。また仁徳天皇の皇女であるこの大后は、安康記に雄略天皇の結婚の候補者として登場し、仁徳記から雄略記をつなぐ役割を果している。本稿では(A) (I)の伝承の中で雄略天皇が女性たちとの交渉を通してどのように描写されているか、吉野や葛城の伝承も視野に入れて二話一連の構成から検討する。特に若日下部王を中心に、大后と対照的に老いが描かれる赤猪子の伝承を起点として、雄略天皇像がどのように造型されているかを考察したい。

一 若日下部王伝承

若日下部王は仁徳記に、「又上に云へる日向の諸縣君、牛諸の女、髮長比賣を娶して、生みませる御子、波多毘能大郎子、亦の名は大日下王。次に波多毘能若郎女、亦の名は長日比賣命、亦の名は若日下部命。」^二(傍点傍線、筆者注。以下同じ)と記される。系譜上雄略天皇の祖父にあたる仁徳天皇と髮長比売との成婚について青木周平は、「下巻巻頭の天皇として神話的規範としての〈日向〉を受け継ぎつつ「治天下」天皇にふさわしい〈日の御子〉の婚として用意されたのではないか」とし、さらにこの皇

統の重要性は、髮長比売の娘、若日下部王が雄略天皇の〈日の御子〉像を支えることになる点^⑦であると指摘する。安康記では、安康天皇が大日下王に弟の大長谷王子と若日下部王の結婚を打診する。大日下王は押木玉縷を献上して承諾の意を示すが、根の臣の讒言により殺される。安康天皇は大日下王の嫡妻長田大郎女を大后とするが、連れ子の目弱王は父の仇の安康天皇を殺害する。目弱王は都夫良意美の家に逃げ込むが、大長谷王に攻められる。意美の娘訶良比売は葛城の五つ処の屯倉と共に王子に献上され、目弱王を殺した都夫良意美は自尽する。若日下部王の求婚譚はこのような曲折を経て雄略記に続くことになる。

(A)は、前段に雄略天皇と志幾の大県主の事件が記される。

初め大后、日下に坐しし時、日下の直越の道より、河内に幸行でましき。爾に山の上に登りて國の内を望けたまへば、堅魚を上げて舎屋を作る家有りき。天皇其の家を問はしめて云りたまひしく、「其の堅魚を上げて舎を作るは誰が家ぞ。」とのりたまへば、答へて白ししく、「志幾の大県主の家ぞ。」とまをしき。爾に天皇詔りたまひしく、「奴や、己が家を天皇の御舎に似せて造れり。」とのりたまひて、即ち人を遣はして其の家を焼かしたまふ時に、其の大県主懼ぢ畏みて、稽首白ししく、「奴に有れば、奴隨らに覺らずて、過ち作りしは甚畏し。故、能美の御幣の物を獻らむ。^a能美の二字は音を以るよ。」とまをして、布を白き犬に繫け、鈴を著けて、己が族名は腰佩と謂ふ人に、犬の繩を取らしめて獻上りき。故、其の火を著くることを止めしめたまひき。即ち其の若日下部王の許に幸行でまして、其の犬を賜ひ入れて詔らしめたまひしく、「是の物は、今日道に得つる奇しき物ぞ。故、都摩杼比^b此の四字は音を以るよ。の物。」と云ひて賜ひ入れたまひき。是に若日下部王、天皇に奏さしたまひしく、「日に背き

て幸行でましし事、甚恐し。(背日幸行之事、甚恐)故、己れ直に參上りて仕へ奉らむ。(故、己直參上而仕奉。)とまをさしめたまひき。是を以ちて宮に還り上り坐す時に、其の山の坂の上に行き立たして歌曰ひたまひしく、

日下部の 此方の山と 疊薦 平群の山の 此方此方の 山の峽に 立ち榮ゆる 葉廣熊白櫛 本には いくみ竹生ひ 末方には たしみ竹生ひ いくみ竹 いくみは寝ず たしみ竹 たしには率寝ず 後もくみ寝む その思ひ妻 あはれ (記九〇番)

とうたひたまひき。即ち此の歌を持たしめて、使を返したまひき。

雄略記の冒頭は、安康記の大日下王事件で中断された若日下部王への求婚譚からはじまる。日下の地は、「大日下王の御名代と爲て、大日下部を定め、若日下部王の御名代と爲て、若日下部を定めたまひき。」(仁徳記)とあり、「日」の語を負う名代名から物語が発想されたと思われる。天皇は妻問いに赴く際に国見をしたところ、堅魚木を上げて天皇の宮殿のように造られた大泉主の家を見つけ焼き払おうとするが、傍線部aの箇所では主は「能美の御幣の物」を献上して放火を免れる。寺田恵子は「稽首」は、臣下が自らの君主と仰ぐ人物に対してとる拝儀として記されており、会話文の中のノミが音仮名で記されているのは、日本語「ノム」の神を対象にして祈願する意を意識した表記と考えられ、「奴有者、……」にはじまる謝罪の言葉の中であって、「雄略天皇を神にも等しい存在と讃える意図から使用されたものであろう。」とする。この途中で得た白犬が、「都摩杼比の物」として若日下部王に献上される。神への捧げ物であり、忠誠のしるしでもある白犬を受け取った若日下部王は傍線部bのように返答する。「背日幸行之事」の表現については、寺田恵子の詳細な研究がある。氏

は、求婚の舞台である日下には、神武記の「日下之蓼津」における、「吾者爲日神之御子、向日而戰不_レ良。……背負日_レ以擊」と共通する思想が流れているとする西宮一民の見解をうけ、「日下」に「背日」して出現することは、日の御子たる天皇にふさわしく、「雄略帝の、天皇としての正当性がここに語られているのではないか。」と指摘する。また先に引用した本文中には、泉主の言動の中に「懼畏」・「甚畏」が、若日下部王の言葉にも「恐」が使用される。壬生幸子は、『古事記』の「恐」と「畏・惶・懼」には、その用字意識にちがいが見られ、「恐」は服従、服属を誓う会話文に多く目につき、「畏」に随伴した逃避的表現は見られないと述べる。若日下部王の言葉は、日の御子である天皇が日の威光を背にしてお出ましになったことは、まことに恐れ多いことで、後に私から宮中に參上してお仕え申し上げるといふ婚姻受諾の意志を表現したものとなる。天皇は若日下部王との婚姻を強く望み、神のようにながめられて奉られた「能美の御幣の物」を「道に得つる奇しき物」とし、そのまま「都摩杼比の物」として贈っている。道の途中で得た白犬の神秘性は婚姻の成就をもたらすものだったのではないか。景行紀四十年是歳の条には、信濃の山中で日本武尊が白鹿に化した山の神を殺して道に迷った際、「時に白き狗、自づからに來て、王を導きまつる状有り。狗に隨ひて行でまして、美濃に出づること得つ。」とあり、白犬が先導している。この後、日本武尊は、宮簀媛と結婚している。垂仁紀三十四年三月には次のような記事がある。

三十四年の春三月の乙丑の朔丙寅に、天皇、山背に幸す。時に左右奏して言さく、「此の國に佳人有り。綺戸邊と曰す。姿形美麗し。山背大國の不遲が女なり」とまうす。天皇、茲に、矛を執りて祈ひて曰はく、「必ず其の佳人に遇

はば、道路に瑞見えよ」とのたまふ。行宮に至ります比に、大龜、河の中より出づ。天皇、矛を擧げて龜を刺したまふ。忽に石に化爲りぬ。左右に謂りて曰はく。「此の物に因りて推るに、必ず驗有らむか」とのたまふ。仍りて綺戸邊を喚して、後宮に納る。

この伝承に記された誓約の要素は雄略記にはないが、妻問いの途中に得た龜が神意を表すものとして婚姻の成就を導いている。白犬は神としてあがめられる天皇の權威を承認するものとして大泉主から奉られた。妻求ぎの道の途中で得られた奇瑞ゆえにその効力を發揮したと思われる。求婚受諾の返答を得た天皇は宮に帰る山の坂で若日下部王を偲び歌を詠む。歌謡冒頭の「日下部」は若日下部王の居所を重ねており、共寝がかなわなかった王に、「後もくみ寝む その思ひ妻 あはれ」と天皇の思いの丈が込められている。「日下部の此方の山」と「疊薦平群山」は物語に即せば、それぞれ若日下部王と雄略天皇の位置を示し、「葉廣熊白禱」は天皇が王への思いを叙述していく媒介物となる。山の坂は、倭建命が足柄坂で亡き弟橘比売への強い思いを込めて三度「あづまはや」と嘆いたとする伝承や、「足柄の御坂に立して袖振らば家なる妹は清に見もかも」（万葉集20・四四二二）にみられるように、隔てられた男女が魂の連帯をはかる場所であった。結婚の約束をかわしながら思いが遂げられなかった天皇にとっては、王への思いを表出する格好の場所である。「思ひ妻あはれ」の末尾の表現は、軽太子の歌謡（記八八番）にも見られる。「思ひ妻」は、「今はじゅうぶんには会えぬ『こもり妻』で、……いとおしい妻をいう」と思われ、「あはれ」は、歌謡によみ込まれた場所や媒介物のもつ境界性と通い合う深い情感をもつ。また「本・末」の「本」については、第二節の赤猪子伝

承のところ述べるが、この表現は、神とそれを迎える巫女の印象を伴って、離れている男女を結びつけ、男女の愛情表現を展開させていく働きをもつと思われる^⑩。山崎かおりはこの歌謡について、「日下部」によって若日下部王のことが暗示されており、「葉広熊白禱」「い茂み竹生ひ」「た繁竹生ひ」「思ひ妻」などによって、若日下部王が雄略天皇でさえも近づき難い立場にあることが表現されている^⑪とする。「寝」の行為が歌謡に詠み込まれるのは、八千矛神と沼河比売（記二・三番）・須勢理毘売（記五番）、日子穗々手見命と豊玉毘売（記八番）、神武天皇と伊須氣余理比売（記一九番）、倭建命と美夜受比売（記二七番）、仁徳天皇と髪長比売（記四六番）、軽太子と軽大郎女（記七九・八三番）、当該歌謡（記九〇番）と雄略天皇と赤猪子（記九二番）である。赤猪子の婚姻は成就しないが、究極的な愛情表現を用いることによっていずれも相手への深い思いと確かな結びつきが希求される。若日下部王は天皇から事件の障害を乗り越えて結婚を望まれる大后であり、王との婚姻の成立は雄略天皇の「日の御子」の系譜に属する者としての地位を確立させるのである。

二 赤猪子伝承

雄略天皇の泊瀬朝倉宮は、脇本の小字「燈明田」から脇本の春日神社にかけての一带が宮の地である可能性が高く、北に三輪山を仰ぐことができるところであった^⑫。上巻には御諸山の神を祭ることが国を作り平和に治めることにつながると記され、中巻では初代神武天皇の大后は、大物主神の子伊須氣余理比売であり、崇神天皇は意富多々泥古に祭祀を委任して大物主神の崇りを解き、国を平和に富み栄えさせた。三輪山は天皇家の重要な祭祀の対象であった。天皇が遊行の際に美和河の辺で衣を洗う麗しい童女

に求婚する状況の設定には、三輪山式神婚説話が根底にあり、赤猪子の原像は三輪山の神に仕える水の女であったと思われる。「引田部」の名は、三輪氏の氏族の引田部氏に由来し、「赤猪子」は山の神としての赤い猪に仕える聖なる女性^⑲であった。赤猪子は山の神に仕えつつ、水の祭祀にも奉仕する巫女であり、神婚譚ではこうした巫女との聖婚が豊饒をもたらすとする信仰があった。当該伝承は、神の位置に雄略天皇がすりかわって語られる。しかし、重要視された三輪山の祭祀に関わる赤猪子と天皇との婚姻は、天皇の忘却と赤猪子の老いによって成立しない。天皇の婚姻は統治領域の拡大や宗教的支配、豊饒予祝と関わっているので、上中巻を通じて描かれてきた天皇の三輪山祭祀のあり方は、当該条には描かれないことになる。雄略紀七年七月条にみられる少子部連螺贏が天皇に命じられて三諸岳の神を捉えに行く伝承にあるように、天皇家が三輪氏を圧倒して政治的に優位に立ったことが赤猪子伝承に投影されたのかもしれない。大脇由紀子は、二つの伝承は、「天皇家と三輪山祭祀との関係を象徴するものであり、天皇家の祭祀から、つまり国家祭祀から三輪山祭祀が離れていったことを意味しているのではないか。」^⑳と述べる。若日下部王求婚譚の次に配される(B)の赤猪子説話の意味を見ていく。

亦一時、天皇遊び行でまして、美和河に到りましし時、河の邊に衣洗へる童女有りき。其の容姿甚麗しかりき。天皇其の童女に問ひたまひしく、「汝は誰が子ぞ。」ととひたまへば、答へて白ししく、「己が名は引田部の赤猪子と謂ふぞ。」とまをしき。爾に詔らしめたまひしく、「汝は夫に嫁はざれ。今喚してむ。」とのらしめたまひて、宮に還り坐しき。故、其の赤猪子、天皇の命を仰ぎ待ちて、既に八十歳を經き。是に赤猪子以爲ひけらく、命を望ぎし間に、

已に多き年を経て、姿體瘦せ萎みて、更に持む所無し。然れども待ちし情を顯さずては、愠きに忍びず、とおもひて、百取の机代物を持たしめて、参出て貢獻りき。然るに天皇、既に先に命りたまひし事を忘らして、其の赤猪子に問ひて曰りたまひしく、「汝は誰しの老女ぞ。何由来参來つる。」とのりたまひき。爾に赤猪子、答へて白ししく、「其の年の其の月、天皇の命を被りて、大命を仰ぎ待ちて、今日に至るまで八十歳を經き。今は容姿既に蒼いて、更に持む所無し。然れども己が志を顯し白さむとして参出しにこそ。」とまをしき。是に天皇、大く驚きて、「吾は既に先の事を忘れつ。然るに汝は志を守り命を待ちて、徒に盛りの年を過ぐしし、是れ甚愛悲し。」とのりたまひて、心の裏に婚ひせむと欲ほししに、其の極めて老いしを憚りて、婚ひを得成したまはずて、御歌を賜ひき。其の歌に曰ひしく、

御諸の 嚴白橋がもと 白橋がもと ゆゆしきかも 白橋原童女 (記九一番)

といひき。又歌曰ひたまひしく、

引田の 若栗栖原 若くへに 率寝てましも 老いにけるかも (記九二番)

とうたひたまひき。爾に赤猪子の泣く涙、悉に其の服せる丹指の袖を濕らしつ。其の大御歌に答へて歌曰ひけらく、

御諸に つくや玉垣 つき餘し 誰にかも依らむ 神の宮人 (記九三番)

とうたひき。又歌曰ひけらく、

日下江の 入江の蓮 花蓮 身の盛り人 羨しきろかも (記九四番)

とうたひき。爾に多の祿を其の老女に給ひて、返し遣はしたまひき。故、此の四歌は志都歌なり。

この説話には、某年某月に天皇の求婚をうけた童女の時から、待ち続け
て老女となり天皇に志を訴えるまで八十歳の時の経過が語られる。赤猪子
には「姿體瘦せ萎みて」「容姿既に耆いて」「更に恃む所無し。」という
「容姿甚麗し」からの変質が記されるが、対する雄略天皇の老いは語られ
ない。

九二番と九四番の歌謡は「御諸」が詠まれ対応関係がみられる。九二番
の「白檮」の詠まれ方は、九一番同様に木のモトが詠まれるが、ミモロと
いう神の降臨の場を示す語や、イツの神威あるの意、ユシキの語によっ
て九一番のいずれ必ず思いを遂げる「寢」の表現に展開していく葉広熊白
檮の比喩とは対照的な様相を示している。万葉集において樹木のもととは次
のように歌われる。

莫囂圓隣之大相七兄爪湯気わが背子が立たせりけむ嚴櫃が本（1・9）

この山の黄葉の下の花をわれはつはつに見てなほ恋ひにけり（7・一三〇六）

長谷の斎楓が下にわが隠せる妻 茜さし照れる月夜に人見てむかも（11・二
三五三）

大野らに小雨降りしく木の下に時と寄り来ねわが思へる人（11・二四五七）

また日本書紀歌謡には、

本毎に 花は咲けども 何とかも 愛し妹が また咲き出来ぬ（紀一一四番）

とある。これらを見ると、樹木の下の本に在るのは、恋しい大切な存在で
あり、思ひ人である。二例目のように対象が女性の場合は花に喩えられる
こともある。三例目は隠り妻であっても人に見られる存在であり、四例目
は恋する対象として木のもとに来てほしいと歌われる。当該歌謡では神聖

な白檮の木もとの「白檮原童女」であるが、それは「ゆゆしき」存在で
ある。ユシは万葉集に、「懸けまくの ゆゆし畏き 住吉の わが大御
神」（19・四二四五）のように、神に対して用いられるが、短歌には次のよ
うに思うにまかせぬ相手への恋情を表出する表現としてでてくる。

独り宿て絶えにし紐をゆゆしみとせむすべ知らにねのみしそ泣く（4・五一）

五）

言に出でて言はばゆゆしみ朝貌の秀には咲き出ぬ恋もするかも（10・二二七）

五）

言に出でて言はばゆゆしみ山川の激つ心を塞かへたりけり（11・二四三三）

朝去きて夕は来ます君ゆゑにゆゆしくも吾は嘆きつるかも（12・二八九三）

青柳の枝きり下し斎種時きゆゆしき君に恋ひ渡るかも（15・三六〇三）

青木周平はこれらの例を検討し、「ゆゆし」は、隔てられる男女の嘆きに
通じる質をもつと指摘する。はじめの四例は二人の関係性が途絶えてしま
うことを畏れて嘆いたり、心に秘めた悲しみや孤独に堪える様を歌ってい
る。最後の例は、恋の相手が田植えの祭事のように忌みかしこむべき存在
であるために、行き場のない恋心を歌っている。「ゆゆし」き相手との恋
は成就しないのが通例である。品田悦一は、「御諸」の地名が「二人の出
会いのありさまを再び呼び起こしてくる作用」があり、「唱和の場面と発
端部とがこの地名をコードとして対照されることによって、その間に流れ
てしまった歳月の存在が改めて浮かび上がってくる」と指摘する。九三番
の「引田の 若栗栖原」の地名も同様の効果を發揮する。若き日の赤猪子
に対する恋情は、その近寄り難い禁忌性ゆえに激しいものであったことが
ほのめかされ、次の歌謡で、それでも若い時に共寝をしておけばよかった

という後悔が示される。末尾の「老いにけるかも」は、地の文の「其の極めて老いしを憚りて、婚ひを得成したまはずて、」の箇所との一致を考えれば赤猪子をさす。「童女」・「若栗栖原」・「若くへ」と「老い」の間に八十歳の年月が浮かび上がることになる。九三番歌では、玉垣の築き残しのように、誰に頼ろうか、として、自身のことを「神の宮人」と呼んでいる。赤猪子は「志を守り命を待ちて、徒に盛りの年を過ぐし」たので、今後も忠誠を尽くす相手は天皇であろう。本文の内容に即せば「神の宮」は天皇の宮、皇居をさすことになる。上田設夫は、この歌謡において赤猪子が斎く対象は神であり、雄略天皇は神として拝され、赤猪子は変わることなく奉仕する巫女として描かれていると指摘する。この巫女の奉仕を受けて絶えず変若ちかえる神人の性格を有する存在として描かれるのが雄略天皇であろう。九五番歌には、赤猪子と対照的な日下江の入江の蓮に喩えられた身の盛り人である若日下部王が登場する。蓮は日下のある河内と関わりが深い。『延喜式』卷三十九 内膳司 供御月料として、「蓮子一斗五升七合五勺」とあり、荷葉として、

稚葉ワカイハ七十五枚。波斐四把半。並起五月中旬。盡六月中旬。
壯葉サカリ七十五枚。蓮子シ廿房。稚藕ハスネ十五條。起六月下旬。盡七月下旬。
黄葉七十五枚。蓮子廿房。稚藕十五條。起八月下旬。盡九月下旬。
右河内國所進。各隨月限隔一日供之。

と記される。万葉集には、蓮葉にたまった水を玉と表現する歌(16・三八三七)など四首がある。このうち

勝間田の池はわれ知る蓮無し然言ふ君が鬚無き如し (16・三八三五)

の左注には、新田部親王が勝間田の池を御覧になり、「感緒御心之中。還自彼池不忍怜愛。於時語婦人曰今日遊行、見勝間田池、水影濤々、蓮花灼々。何怜断腸、不可得言。」と蓮に恋をかけて婦人に戯れたとある。蓮花は怜愛の情を呼びおこし、水面には水の光が揺れて波立ち、輝くばかりの美しさをもつと表現される。『遊仙窟』には、「芙蓉生於澗底、蓮子實深、」とあり、「蓮」は恋に通じ、「蓮子」は恋思を示している。また、十娘を喩えて、「旦來披霧、香處尋花、忽遇狂風、蓮中失藕。」とある。「蓮」は憐に通じ、「藕」はちすすで、同音の偶をかけた連れ合いの意を含み、大切なちすすを見失ったと述べる。蓮花は恋する美しい女性になぞらえられている。皇極紀三年六月の条には、

戊申に、劔池の蓮の中に、一つの莖に二つの萼はなぶさある者有り。豊浦大臣、妄に推して曰はく、「是、蘇我臣の榮えむとする瑞なり」といふ。

とある。大臣の付会であるが、蓮花の変異が繁栄の祥瑞として受け止められている。中西進は、万葉集の「山振の立ち儀ひたる山清水」(2・二五八)の山清水は十市皇女を復活再生させる生命の水であり、その泉は黄金の花によそわれているという世界的な信仰があり、ギリシャやインドではその花は蓮と考えられていたと述べる。これをそのまま古代日本の例にはできないかもしれないが、朝の日の光を浴びて水をたたえた水面一杯に花開く美しい蓮は、日下の太陽信仰をその名に負う若日下部王の形容としてふさわしい。王と赤猪子は共に水に関わるが、一方は生きた蓮に喩えられる若々しい永遠性を、もう片方は時の流れの中の変質性を背負っている。青木周平は、「赤猪子の〈老〉」は、后である若日下部王の〈若〉と対比されることにより、后讚美、ひいては雄略天皇讚美につながる質をもっているように

める」²⁸と指摘する。復活再生を繰り返す天皇に類える存在である若日下部王は、時間の流れを超越した「身のさかり人」として天皇に愛され、羨望の的として赤猪子と対照的に描かれる。大長谷若建命に並ぶにふさわしい太后として若日下部王は配される。

三 吉野と葛城

吉野の宮に行幸した天皇は、吉野川のほとりで出会った美しい童女と結婚する。以下(C)(D)(E)の伝承を見ていく。

後更に亦吉野に幸行でましし時、其の童女の遇ひし所に留まりまして、其處に大御吳床を立てて、其の御吳床に坐して、御琴を弾きて、其の嬢子に儂爲しめたまひき。爾に其の嬢子の好く儂へるに因りて、御歌を作みたまひき。

其の歌に曰ひしく、

吳床座の 神の御手もち 弾く琴に 舞する女 常世にもがも (記九五番)

といひき。即ち阿岐豆野に幸でまして、御擣したまひし時、天皇御吳床に坐しましき。爾に蝸御腕を咋ふ即ち、蜻蛉来て其の蝸を咋ひて飛びき。蜻蛉を訓みてアキツと云ふ。是に御歌を作みたまひき。其の歌に曰ひしく、

み吉野の 袁牟漏が嶽に 猪鹿伏すと 誰ぞ 大前に奏す やすみしし
我が大君の 猪鹿待つと 吳床に坐し 白袴の 衣手著具ふ 手胼に
蝸かきつき その蝸を 蜻蛉早咋ひ かくの如 名に負はむと そらみ
つ 倭の國を 蜻蛉島とふ (記九六番)

といひき。故、其の時より其の野を號けて阿岐豆野と謂ふ。

又一時、天皇葛城の山の上に登り幸でましき。爾に大猪出でき。即ち天皇鳴

籟を以ちて其の猪を射たまひし時、其の猪怒りて、宇多岐依り來つ。宇多岐の音をよ。故、天皇其の宇多岐を畏みて、榛の上に登り坐しき。爾に歌曰ひたまひしく、

やすみしし 我が大君の 遊ばしし 猪の病猪の 唸き畏み 我が逃げ
登りし 在丘の 榛の木枝 (記九七番)
とうたひたまひき。

これらの場面は地の文と歌謡の語が密接に関係し響き合っている。吉野の場面に共通するのは、天皇が「御吳床に坐」す行為であるが、九五番ではその様を「吳床座の神」と表現している。土橋寛はこの神を「神仙的な神」と見て、この物語は『文選』の「高唐賦」や「神女賦」が素材にあるとする。²⁹ こうした見方はある程度可能であろう。琴の音色によって天皇に神が乗り移り、天皇が神そのもののように描かれる。中村啓信は、「天皇の手が神仙者の手となって」と解釈し、「吉野を神仙世界の地トコヨと見立てている」とする。³⁰ 『日本思想大系古事記』では「吳床」を「高御座・玉座の意」としている。中川ゆかりは、九五番の歌謡は、天皇の神に匹敵するような尊貴さを鮮明に印象的に語ろうとしており、「吳床」は呉国からもたらされた装飾的でおごそかさを感じさせる座具として、天皇の権威をきわ立たせる役割を荷っていると指摘する。³¹ 天皇の眼前で神仙女のようにも、吉野川の精のようにも描かれる童女がよく舞ったり、「手胼に 蝸かきつき」その蝸を「蜻蛉早咋ひ」のように、田の豊饒のシンボル蜻蛉までもが天皇に奉仕する情景が繰り広げられる。九七番では、天皇をうたき依り來た病み猪から守った榛の木がよまれている。情景描写の後に九五番では嬢子の舞するめでたい様が永遠であってほしいと言寿いでいる。九六番は蜻

鈴島の地名起源と結びついている。阿岐豆野は、本来は「明つ野」で、溪谷が開けて急に明るくなった所の称とされる。蜻蛉島のいわれは神武紀に次のように記される。

三十有一年の夏四月の乙酉の朔に、皇輿巡り幸す。因りて腋上の嘸間丘に登りまして、國の状を廻らし望みて曰はく、「妍哉乎、國を獲つること。内木綿の眞進き國と雖も、蜻蛉の譬喏の如くにあるかな」とのたまふ。是に由りて、始めて秋津洲の號有り。……饒速日命、天磐船に乗りて、太虚を翔行きて、是の郷を睨りて降りたまふに及至りて、故、因りて目けて、「虚空見つ日本國」と曰ふ。

ここでは葛城での国見によって、「蜻蛉の譬喏」の形状を確認し、それが秋津洲の名称の由来として語られる。この行為が国を得ることとつながっている。紀では「そらみつ やまとの国」の称詞は饒速日命の言葉による。九六番の歌謡では、そらみつ 倭の国と蜻蛉島が同一呼称のように扱われ、それが地の文で吉野の阿岐豆野に展開している。蜻蛉と阿岐豆を結びつけることで、その地が秋に関わる豊饒と豊獵の意味をもった聖なる地であることを重層的に語っている。この九六番と九七番、一〇三番に共通して見られるのが、「やすみしし 我が大君の」の表現である。この表現は、景行記の倭建命を讃えた二八番にも見られる。上田設夫は、雄略記に三例この天皇讚美の表現が見られることは、雄略天皇を「やすみしし我が大君」として性格づけようとする編述者の強い意識が働いていると見なしている³⁵。稲荷山鉄剣銘によれば、「辛亥年」（四七一年）に「獲加多支鹵大王」とあり、ワカタケル（雄略）は大王と称せられている。また『日本書紀』の編纂過程には、文体・用語から卷十三と卷十四の間、雄略紀の前後に大きな

区分があることが指摘されている。紀年・暦年も卷三の神武紀から卷十三の允恭・安康紀までが儀鳳暦により、卷十四の雄略紀から以後、最後の持統紀までが元嘉暦により、雄略紀の前後によって分かれている³⁶。雄略朝は古代の画期と考えられていた。雄略記に「やすみしし 我が大君」の称詞が用いられるのも、この天皇が実質的に江田船山古墳出土太刀銘にみられる「治天下」大王と考えられたからであろう。万葉集では、二七例あるヤスミシシの用字は、「八隅知之」が二〇例で圧倒的に多い。釈日本紀は「八隅知也。言四海八埏也。委見上。」とする。冠辞考には、万葉集の用字「安見知之」（六例）から、「安らけく見そなはししろしめし賜ふてふ語をつづめ」た表現とある。橋本達雄は記紀万葉の用例を検討し、「やすみしし」の原義の表記は「八隅知之」であり、道教の神学に基づき、全世界を知らしめす意であるとする。また和田萃は、「やすみしし」の意味を「国土の隅々（八隅）までも支配する意」と捉え、「八隅」とは八島国あるいは大八洲を指し、これが「天地八方」の概念と共に、高御座を八角形とする思想を生んだとする。古事記には「吳床」の例が七例あり、仮名書の例二例を含め五例が当該引用箇所に含まれる。あとの二例は、応神記の大山守命の反逆のところで、皇位継承者とされた宇遲能和紀郎子が、「詐りて舍人を王に爲て、露はに吳床に坐せ」た箇所と、大山守命が、「弟王其の吳床に坐すと以爲ひ、」の箇所に見られる。青木周平は、七例が「天皇の行為中に限定されており、天皇の権威の象徴的意味をもっている」と指摘する。宇遲能和紀郎子は天津日継を知らず予定者であり、天皇に準ずる存在とみなされ、「吳床」は計略において大山守命に替え玉が和紀郎子であると信じさせる席である。「吳床」が思想大系が注するように「高御座・玉座の意」とすれば、雄略記の伝承において吉野の阿岐豆野は天皇の座す

大八島国の中心と位置づけられ、かつ神の座す場として表現される。阿岐豆野は、明つ神が顕現する明つ野として選ばれた地名だったのでないか。日本書紀には「明神」の語が四例ある。

- ・明神御宇日本天皇（孝徳紀大化元年七月条 二箇所）
- ・明神御宇日本倭根子天皇（孝徳紀二年二月条）
- ・現爲明神御八嶋國天皇（孝徳紀二年三月条）
- ・明神御大八洲倭根子天皇（天武紀十二年正月条）

明神御大八洲倭根子天皇の勅命をば、諸の國司と國造と郡司と百姓等と、諸に聽くべし。朕、初めて鴻祚登ししより以來、天瑞、一二に非ずして多に至れり。傳に聞くならく、其の天瑞は、政を行ふ理、天道に協ふときは、應ふと。是に今朕が世に當りて、年毎に重ねて至る。……

これらのうち孝徳紀の例は、令の知識によって修飾された文言とされ、確實な例は続紀、文武元年八月の文武天皇即位の宣命にみえる「現御神止大八嶋国所知天皇大命」とされる。^④天武紀の例も、神野志隆光は天武朝段階には淨御原令に反映されるような即神思想の状況、むしろ淨御原令に「明神」は認めがたい状況であると指摘する。天武紀の詔は筑紫大宰丹比真人嶋等が「三足のある雀」を貢った際に大極殿の宴においてなされている。傍点を付した箇所には、天子の行う政治が天道にかなうとき、天から祥瑞が示されるとある。思想が詞章化されるのは後世であっても、古事記の編纂者は、阿岐豆野における天皇の玉座や狩獵の場において田の神蜻蛉が現れて天皇を助けたり、葛城山で榛の木が天皇を守る奇事が起こる様子を語り、明神思想を雄略天皇と結びつけようとしたのではないかと思われる。明神が顕現するのが吉野の阿岐豆野であり、阿岐豆から蜻蛉を導き出し、「蜻

蛉島倭」へと展開させ、さらには神武紀の国号の由来である「そらみつやまと」の伝承をとり込んで、葛城へと話をつないでいる。

続いて(F)の葛城山での一言主大神との遭遇は次のように語られる。

又一時、天皇葛城山に登り幸でましし時、百官の人等、悉に紅き紐著けし青摺の衣服を給はりき。彼の時其の向へる山の尾より、山の上に登る人有りき。既に天皇の鹵簿に等しく、亦其の裝束の狀、及人衆、相似て傾らざりき。爾に天皇望けまして、問はしめて曰りたまひしく、「茲の倭國に、吾を除きて亦王は無きを、今誰しの人ぞ如此て行く。」とのりたまへば、即ち答へて曰す狀も亦天皇の命の如くなりき。是に天皇大く忿りて矢刺したまひ、百官の人等悉に矢刺しき。爾に其の人等も亦皆矢刺しき。故、天皇亦問ひて曰りたまひしく、「然らば其の名を告れ。爾に各名を告りて矢彈たむ。」とのりたまひき。是に答へて曰しけらく、「吾先に問はえき。故、吾先に名告りを爲む。吾は惡事も一言、善事も一言、言ひ離つ神、葛城の一言主大神ぞ。」とまをしき。天皇是に惶畏みて白したまひしく、「恐し、我が大神、宇都志意美有らむとは、覺らざりき。」と白して、大御刀及弓矢を始めて、百官の人等の服せる衣服を脱がしめて、拜みて獻りたまひき。爾に其の一言主大神、手打ちて其の捧げ物を受けたまひき。故、天皇の還り幸でます時、其の大神、満山の末より長谷の山口に送り奉りき。故、是の一言主大神は、彼の時に顯れたまひしなり。

「茲の倭國に、吾を除きて亦王は無きを、今誰しの人ぞ如此て行く」と問いかへ、相手の返答に「大く忿りて」弓に矢をつがえる行為には、自らを倭國の王として主張する強い自負がうかがえる。荻原千鶴はこの自称性や怒りは雄略天皇の特異な造形であり、雄略像には『古事記』が構築しようとした世界の枠にとどまりきらないものがあると指摘する。^④紅紐付青摺装

束は農耕祭式に着用する祭式装束であるときれ、葛城山巡幸は王者の祭政の一環と考えられる。飯村高宏は、「相似不傾」の部分には、天皇と言主神は等価であることが示唆され、神の姿を天皇の姿に見立てることでこの表現が成立していると述べる。両者は弓矢をつがえ一触即発の危機に瀕するが、天皇の「名を告れ」の命に従い一言主神は自らの託宣神の性格を明らかにして、名告りをする。阿部寛子は、「実体を自ら明かすことによって今、葛城の大神は大王雄略に服属したことになる」とする。雄略天皇はこの名告りを聞き、「恐し、我が大神、宇都志意美有らむとは、覺らざりき。」と答える。奥村紀一は、うつしおみは「現し臣」(この世の臣下)の意であり、葛城山では、相手が大神なので、天皇の方が自らを卑下したと述べる。相手の領域に入る時、神がその力を示現する際に、倭建は走水の渡において貴い犠牲を捧げてからも難を逃れ、伊吹山では言挙げによって打ちのめされる。雄略天皇は出現した大神に最大限の敬意を払うことによって、「我が大神」と呼びかけて神に近づき、神を自分の側に寄せている。天皇が献った衣服を一言主神が手を拍って受納したのは、神が天皇の祭祀を受けることを意味する。一言主神は天皇を長谷の山口まで「送奉」とあり、紀の「來目水までに至る」記述に比すると、記には天皇に対する大神の最大限の敬意がうかがえる。「一言主大神は、彼の時に顯れたまひしなり。」の「顯」の用字は、『古事記』では神の出現することを意味しているという。雄略天皇は現し臣と表現される自身と等価の姿で一言主神を認め、神の正身に直接に接することが出来た唯一の天皇として描かれる。しかもその出会いは、夢や神託を通さずに、神の時間帯である夜ではなく、昼になされている。『古事記』は吉野と葛城の伝承を通して、大王とよばれる古代王の姿と、明神(現神)の思想につながる始祖王としての姿をも

つ雄略天皇を、祭式的な時間の中に浮かび上がらせ、神と関わらせながら現実の時間を超えた存在として描こうとしたのではないか。雄略天皇は仁徳天皇につながる皇統の末期をかざる大王として、さらには継体天皇以降の天皇像を支える強大な存在として語られている。

四 金鉏岡・天語歌

又天皇、丸邇の佐都紀臣の女、袁杼比賣を婚ひに、春日に幸行でましし時、
媛女道に逢ひき。即ち幸行を見て、岡の邊に逃げ隠りき。故、御歌を作みた
まひき。其の御歌に曰りたまひしく、

媛女の 隠る岡を 金鉏も 五百箇もがも 鉏き撥ぬるもの (記九八番)

とのりたまひき。故、其の岡を號けて金鉏岡と謂ふ。

(G)における袁杼比売との出会いは「媛女道に逢ひき。」のように相手と主格として語られる。この表現について中川ゆかりは、祭祀の場で神と一体化する巫女は神に準ずる存在と見なされ、出会う相手が人間であっても、その出会いが自らの意志を越えたものとして驚きをもって語られる際にみられると指摘する。媛女は「逃げ隠」れる意志をもつ存在であり、隠び妻型の伝承になっている。対する天皇は、五百個の金鉏を使っても土を鉏き、媛女を見つけ出したいという決意と自身の強大な力を示す。この歌謡には万葉集の巻頭歌にみられる「菜摘ます兒」への我を誇示する姿勢がうかがえよう。雄略天皇の袁杼比売への示威の様は、九二番の「老いにけるかも」の主格が天皇ではなく赤猪子であることを思わせる。天皇と袁杼比売の婚姻は次の豊樂で完結をする。(H)と(I)の伝承を見ていく。

又天皇、長谷の百枝槻の下に坐しまして、豊樂爲たまひし時、伊勢國の三重
媛、大御盞を指擧げて獻りき。爾に其の百枝槻の葉、落ちて大御盞に浮かび
き。其の媛、落葉の盞に浮かべるを知らずて、猶大御酒を獻りき。天皇其の
盞に浮かべる葉を看行はして、其の媛を打ち伏せ、刀を其の頸に刺し充てて、
斬らむとしたまひし時、其の媛、天皇に白して曰ひけらく、「吾が身を莫殺し
たまひそ。白すべき事有り。」といひて、即ち歌曰ひけらく、

纏向の 日代の宮は 朝日の 日照る宮 夕日の 日がける宮 竹の根
の 根垂る宮 木の根の 根蔓ふ宮 八百土よし い築きの宮 眞木さ
く 檜の御門 新嘗屋に 生ひ立てる 百足る 槻が枝は 上枝は 天
を覆へり 中つ枝は 東を覆へり 下枝は 鄙を覆へり 上枝の 枝の
末葉は 中つ枝に 落ち觸らばへ 中つ枝の 枝の末葉は 下つ枝に
落ち觸らばへ 下枝の 枝の末葉は あり衣の 三重の子が 指擧せる
瑞玉盞に 浮きし脂 落ちなづさひ 水をろこをろに 是しも あや
に恐し 高光る 日の御子 事の 語言も 是をば (記九九番)

とうたひき。故、此の歌を獻りつれば、其の罪を赦したまひき。爾に大后歌
ひたまひき。其の歌に曰りたまひしく、
倭の この高市に 小高る 市の高處 新嘗屋に 生ひ立てる 葉廣
五百箇眞椀 其が葉の 廣り坐し その花の 照り坐す 高光る 日の
御子に 豊御酒 獻らせ 事の 語言も 是をば (記一〇〇番)

とのりたまひき。即ち天皇歌曰ひたまひしく、
ももしきの 大宮人は 鶉鳥 領巾取り懸けて 鶴鶴 尾行き合へ 庭
雀 うずすまり居て 今日もかも 酒みづくらし 高光る 日の宮人
事の 語言も 是をば (記一〇一番)

とうたひたまひき。此の三歌は天語歌なり。故、此の豊樂に其の三重媛を譽

めて、多の祿を給ひき。是の豊樂の日、亦春日の袁杼比賣、大御酒を獻りし
時、天皇歌曰ひたまひしく、

水灌く 臣の嬢子 秀罇取らすも 秀罇取り 堅く取らせ 下堅く 彌
堅く取らせ 秀罇取らす子 (記一〇一番)

とうたひたまひき。此は宇岐歌なり。爾に袁杼比賣、歌を獻りき。其の歌に
曰ひしく、

やすみしし 我が大君の 朝とには い倚り立たし 夕とには い倚り
立たす 脇机が下の 板にもが あせを (記一〇三番)

といひき。此は志都歌なり。

九九番は「纏向の 日代宮は……」と景行天皇の宮ぼめから歌いおこさ
れる。朝日夕日の輝く様は日代の称辞としてふさわしい。その宮の新嘗屋
に寄せて、天より下り来たった靈威が槻の聖木を伝い、高天原から東方に、
さらには鄙の国まで行き渡り、やがて樹下の三重の媛が捧げ持つ大御盞の
中にふり注ぐ様が歌われる。景行朝は倭建命の東征・西征によって天皇の
支配が大八島国に行き渡った時代として位置づけられる。倭建命は美夜受
比売との唱和の歌で「高光る 日の御子 やすみしし 我が大君」(記二
八番)と讃えられている。景行記のこの表現を除き、古事記では「やすみ
しし 我が大君」と「高光る 日の御子」が使い分けられている。「やす
みしし 我が大君」の表現は、第三節で見たように雄略天皇にも用いられ
る。また「天」は、倭建命が八尋白智鳥に化し、「天に翔りて」とある表
現からうかがえるように、天皇家の統治は高天原思想を基盤としており、
天皇は天から降り、再び天に帰着する存在として描かれている。居駒永幸
は、天語歌が新嘗祭・大嘗祭に関わる詞章であることから、「天は祭式の

中心を指すものであり、東・鄙はそこに奉仕するユキ・スキの国に対する表現^④と説く。また多田元はこれをさらに具体化して、「天」は「祭祀王の坐し所^⑤」と説く。「光る」は自ら光を発する自動詞で、「高光る」は天に輝く日の神の御子に対する深い畏敬の念を示す語であり、倭建が西征東征の際に最初に立ち寄った伊勢の天照大御神の信仰とも関わるだろう。黒田龍二は、伊勢地方は弥生時代から開けた地域であり、五世紀段階で内宮の地に大規模な祭祀場が営まれるが、それはヤマト王権の祭祀場である可能性がもっとも高いとする。三重嫁が天語歌を奉ったのは、三重が東方への入口であり、「天」とつながる信仰の地、伊勢を背景にするところであったので、新嘗祭に「語り言」を奏上する者としてふさわしいとみなされたのであろう。九州から東国まで天皇家の支配が行き渡った大王の起源は、景行朝の倭建命の事蹟と結びつけられる。九九番の「浮きし脂 落ちなづさひ 水こそろこをろに」の表現は、創世神話の「國稚く浮きし脂の如くして」、「鹽許々袁々呂々邇書き鳴して」と通い合う。倭建は熊曾建征伐の際に、「吾は纏向の日代宮に坐しまして、大八島國知らしめず、大帯日子淤斯呂和氣天皇の御子、名は倭男具那王ぞ。」と名のりをする。景行朝は国生み神話をその起源と捉え、雄略朝もまたその流れを踏襲している。始原から景行朝を経て「天」を根元とする歴史的な時間の流れが、祭式の場において今盃に浮かんだ榎の葉に凝縮して表れたことを奇事として、三重嫁は天皇に「あやに恐し」と奏上する。一〇〇番の太后の歌には、倭の高市、それは天に直結する場でもあるが、市に來臨する神を迎える新嘗屋に市の目印として植えられた神木、「葉廣五百箇眞椿」を新嘗の場に臨んだ照り坐す天皇に喩える。西郷信綱は、「椿の花は春のことぶれで、その盛りはほば新嘗祭のころと一致する^⑥」と述べる。祭式の主催者である天皇と

太后は雄略記において共に日に関わる花に喩えられている。太后は三重嫁に「豊御酒 獻らせ」と勸める。九九番に「指擧せる」、一〇〇番に「獻らせ」、一〇二番に「秀罽取らす」「取らせ」のように新嘗に奉仕する女性たちに敬語が用いられるのは、女性たちが來臨した神や神靈を天皇に媒介する存在とみなされたからであろう。吉村武彦は、新嘗祭という統治原理を確認する儀式の場で、「大八島国という国土支配のコスモロジー」「天―東―夷」が歌われたこと^⑦に、九九番の歌の重要な意味があると説いたが、嫁の捧げた酒杯を飲み干すことは、天から降り来た祖靈と一体化し、国土の靈威を取り込み、大八島国を統治する資格を更新していくことにつながる。一〇一番では、天皇が大宮人を讃美する。「高光る」の称詞は、「日の宮人」に続いている。森朝男はこの歌謡の「今日もかも 酒みづぐらし」の表現は、新嘗の日を特に讃えてとり出し、その今日の日に神の降臨を仰いで華やぐハレの祝祭の場を、一步離れた圏外から讃え言寿ぐ趣きをもつとする。また大宮人が鳥に喩えられることについて長野一雄は、「鶉鳥は卵をよく生み、鶉は性交の所作を示し、庭雀は数多く群がって穀物をつつく、といったことから、三種の鳥は聖なる豊穰の意味をもつのではなからうか^⑧。」と指摘する。新嘗の祭祀は聖婚と服属を語ることにその主意があると思われ、これらの鳥は豊饒を予祝する景物としてふさわしい。一〇二番は、春日の袁杼比売を「水灌く 臣の嬢子」と表現している。比売を臣下として天皇にお仕えする臣とし、「水灌く」の掛かり方は未詳であるが、「水そそく」行為は聖水によって復活再生を期する新嘗の祭儀に関わる表現であろう。天皇はしっかりと徳利をとるように繰り返し促している。一〇三番で比売は「やすみしし 我が大君の」と歌いおこし、大八島国を統治する靈威を身につけた天皇が朝夕に使用する脇息の下の板になりたい

と歌う。この歌謡の「やすみしし」は、朝夕に使用する「脇机」に続いていくことから、「安見知之」（万葉集に六例）の用字の意をとり、「やすみしし」は、王が休むことを理想とする表現とする方がふさわしいかもしれない。新嘗祭に聖所への忌み隠りを経て再誕する大王と、復活再生の祭儀に仕え聖婚をする巫女のイメージが歌謡の根底にあるのだろう。雄略記は豊の楽の宴の場で歌われた寿歌五首の連続をもって閉じられる。神野志隆光は、「これらの歌をつうじて、雄略治政のめでたさを語り上げようとする」⁵⁷ 意図があるとみる。天語歌の新嘗の豊楽の場に登場する女性たちは、日下の地に関わる若日下部王、倭の東に位置する伊勢を背景にもつ三重姦、春日の袁杼比売の春日も、万葉集に「春日を 春日の山の 高座の 三笠の山に」（3・三七二）の枕詞からすると春日はるひに関わる地と思われ、春を招来する新嘗の祭式にふさわしく、三者は太陽信仰を背負う存在として、「高光る 日の御子」と讃えられる雄略天皇に配されている。間瀬智代は九九番の歌謡を「空間と時間とが交錯する壮大な歌意を持つ、他に類を見ない秀歌」⁵⁸ と評する。また金沢英之は、垂直方向から水平方向へと、「国土の神話的創造から、ヤマトタケルによるアヅマ平定によるその政治的完成までの時間と空間とが、一枚の葉の中に凝集」し、倭建の東征に関わる地、伊勢の三重の姦がそれを奉ることによって、「今のこの雄略の世を、そうして実現された十全な世界を受け継ぐものと讃え、最後にこの出来事が未来にわたっても語り継がれてゆくことになろうと言寿ぐ」⁵⁹ ことにこの歌謡の価値をみる。一〇三番では、朝と夕という一日の日の動きが語られ、九番では、創世から景行朝を経て連綿と続く悠久の時間の中で、「天」を根源とし、天の下に位置する倭・東・鄙に靈威があまねく行き渡る様子が歌われる。靈威は日の御子の象徴である日（靈）と重ねられ、朝・夕、東・

鄙のように太陽の軌跡が語られる。新嘗の祭を根幹として一年のはじまりと終わりに祭祀を行い、新たな春をもたらし、大王の統治する空間を繁栄に導き、時を支配し、四時の運行を司る、変若返りを繰り返す祭政王として雄略天皇は描かれている。

おわりに

「高光る 日の御子 やすみしし 我が大君」と讃美される倭建命は、「あらたまの 年が來経れば あらたまの 月は來経往く」（記二八番）という時の流れの中で生きる存在である。「品陀の 日の御子」と称され、「高光る 日の御子」と讃えられる仁徳天皇も雁が卵を生む祥瑞については、「世の長人」である武内宿禰にたずねる命に限りある存在として描かれる。これまで述べてきたように雄略天皇には、赤猪子伝承・吉野・葛城において神として表現される記述があり、若日下部王の求婚譚の前半の「能美の御幣の物」でも神のような扱いをうけている。赤猪子への求婚譚では、神の宮人である赤猪子には八十年の歳月が流れているのに、雄略天皇は年の支配をうけていないかのように描かれる。雄略天皇の崩御年は、「壹佰貳拾肆歲 己巳の年の八月九日に崩りましき。」とあり、下巻の天皇の中では抜きんでて長寿である。人の世に生きる大王として時の流れに生きる存在でありながら、神話的な時間の流れの中に生きているようでもある。雄略天皇の永遠性を言寿ぐ女性たち、特に若日下部王は雄略記のはじまりと結びに登場し、時空を超越した祭政王として描かれる雄略天皇像を支えていると思われる。雄略記は二話一連の構成をとりながら、巡幸・国見・求婚・狩獵・新嘗という王者の祭政を描き、「やすみしし 我が大君」「高照らす 日の御子」という称詞によって地上と天上の権威をあわせもつ理想的な大王像を形成

している。それは古事記の編纂を命じた天武天皇に通う姿であろう。

注

- ① 榎本福寿『古事記』雄略天皇条の所伝のなりたち―二話一連の構成について―『古事記年報』第四十一号 一九九九年一月
- ② 島田晴子「赤猪子の歌謡物語」『論集上代文学』第八冊 一九七七年十一月 笠間書院、品田悦一「歌謡物語―表現の方法と水準」『国文学解釈と教材の研究』第三六巻八号 一九九一年七月
- ③ 青木周平「雄略天皇」『古代文学の歌と説話』二〇〇〇年十月 若草書房
- ④ 長野一雄「雄略記の葛城山」『古事記説話の表現と構想の研究』一九九八年五月 おうふう
- ⑤ 中村啓信「雄略天皇と葛城の神」『古事記の本性』二〇〇〇年一月 おうふう
- ⑥ 前掲書①九八頁、榎本氏の模式図のアルファベットは本稿の説話の分類に従い、変更した。
- ⑦ 青木周平「仁徳天皇」前掲書③
- ⑧ 川副武胤「日」と「日子」(一)の用法『古事記の研究 改訂増補版』一九八一年四月 至文堂
- ⑨ 寺田恵子「古事記「稽首」の訓みについて」『国文目白』第三十三号 一九九四年一月
- ⑩ 寺田恵子「古事記「白犬」小考―「のみの御幣の物」と「つまどひの物」と―『湘南短期大学紀要』第五号 一九九四年二月
- ⑪ 西宮一民『古事記 新訂版』一九八六年十一月 おうふう
- ⑫ 寺田恵子「古事記〈若日下部王求婚伝承〉小考―「背日幸行」の解釈を中心に―」『青木生子博士頌寿記念論集 上代文学の諸相』一九九三年十二月 塙書房
- ⑬ 壬生幸子「天照大御神の『見畏』―天石屋戸こもりをみちびく古事記の表現と論理―」『古事記年報』第三十三号 一九九一年一月
- ⑭ 前掲書⑩⑫
- ⑮ 山路平四郎『記紀歌謡評釈』一九七三年九月 東京堂出版
- ⑯ 拙稿「古代道行詞章―影媛歌謡を中心に―」『日本歌謡研究大系(上巻) 歌謡とは何か』二〇〇三年五月 和泉書院
- ⑰ 拙稿「春日皇女の唱和歌謡についての一考察」『古事記年報』第三十九号 一九九七年一月
- ⑱ 山崎かおり「若日下部王の人物像―雄略記の求婚伝承を中心に―」『古事記』大后伝承の研究』二〇一三年十二月 新典社
- ⑲ 和田萃「三輪山祭祀の再検討」『日本古代の儀礼と祭祀・信仰下』一九九五年六月 塙書房
- ⑳ 高崎正秀「皿々山の話」『物語文学序説』一九四二年十二月 青磁社
- ㉑ 守屋俊彦「赤猪子の話―三輪山伝承考―」『古事記研究―古代伝承と歌謡』一九八〇年十月 三弥井書店
- ㉒ 原田敦子「水辺の求婚―赤猪子伝承と井手の下帯説話―」『同志社国文学』第四十一号 一九九四年十一月
- ㉓ 大脇由紀子『古事記』赤猪子説話の歌謡』上田正昭編『古事記の新研究』二〇〇六年七月 学生社
- ㉔ 青木周平「赤猪子物語にみる〈老〉表現」『古事記研究―歌と神話の文学的表現―』一九九四年十二月 おうふう ただし、4・五―五にはふれられていない。
- ㉕ 品田悦一前掲書②
- ㉖ 上田設夫「古代説話と歌謡―雄略記にみる歌謡の機能―」『文学』四四巻十一号 一九七六年十一月
- ㉗ 中西進「宇宙の水」『古代日本人・心の宇宙』二〇〇一年四月 日本放送出版協会
- ㉘ 青木周平前掲書②④
- ㉙ 土橋寛『古代歌謡全注釈 古事記編』一九七二年一月 角川書店
- ㉚ 中村啓信訳注『新版古事記』二一八頁注、二〇〇九年九月 角川学芸出版
- ㉛ 『古事記日本思想大系1』二一七頁 一九八二年二月 岩波書店 青木周平は前掲書③においてこの説を踏襲している。
- ㉜ 中川ゆかり「あぐらゐの神」『上代散文その表現の試み』二〇〇九年二月 塙

書房

- ③③ 前掲書③①二七四頁頭注
③④ 前掲書③①二七五頁頭注
③⑤ 前掲書②⑥
③⑥ 岸俊男「古代の画期雄略朝からの展望」岸俊男編『日本の古代第6巻王権をめぐる戦い』一九八六年十一月 中央公論社
③⑦ 橋本達雄「やすみししが大君」考『万葉集の時空』二〇〇〇年三月 笠間書院
③⑧ 和田萃「タカミクラ―朝賀・即位式をめぐって―」『日本古代の儀礼と祭祀・信仰上』一九九五年三月 塙書房
③⑨ 青木周平前掲書③
④① 『律令』日本思想大系 令巻第八 公式令第廿一の補注六三二頁 一九七六年十二月 岩波書店
④② 神野志隆光「神と人―天皇即神の思想と表現―」『柿本人麻呂研究』一九九二年四月 塙書房
④③ 荻原千鶴『古事記』の雄略天皇像『日本古代の神話と文学』一九九八年一月 塙書房
④④ 舟ヶ崎正孝「一言主伝承からみた雄略天皇の王権的属性」『日本歴史』一七三三号 一九六二年十月
④⑤ 飯村高宏「顕現するヒトコトヌシ―雄略記に於ける表現の方法―」『日本文学論究』五一号 一九九二年三月
④⑥ 阿部寛子「葛城の大神の敗北―古事記における「名告り」から―」『上代文学』第五〇号 一九八三年四月
④⑦ 奥村紀一「「うつせみ」の原義」『国語国文』五二巻十一号 一九八三年十一月
④⑧ 守屋俊彦「氏文と縁起―神話文学への展開―」『日本文学史を読む―古代前期―』一九九〇年四月 有精堂
④⑨ 中川ゆかり「出会いの表現―不思議を語る意識―」『上代散文その表現の試み』二〇〇九年二月 塙書房 ただし、この箇所は用例としてあげられていない。
④⑩ 居駒永幸「天語歌の〈語り言〉と雄略天皇」『古代の歌と叙事文芸史』二〇〇三年三月 笠間書院

年三月 笠間書院

- ⑤① 多田元「祭祀王像としての「天語歌」」『古代文芸の基層と諸相』二〇一一年九月 月 おうふう
⑤② 黒田龍二「神宮の祭儀と建築」『纏向から伊勢・出雲へ』二〇一二年二月 学生社
⑤③ 西郷信綱『古事記注釈第四巻』一九八九年九月 平凡社 一六一頁
⑤④ 吉村武彦「都と夷(ひな)・東国―古代日本のコスモロジーに関する覚書―」『万葉集研究』第二二集 一九九七年三月 塙書房
⑤⑤ 森朝男「景としての大宮人」『古代和歌と祝祭』一九八八年五月 有精堂
⑤⑥ 長野一雄「金鉏岡・長谷百枝槻の構想」前掲書④
⑤⑦ 辰巳正明監修『古事記歌謡注釈 歌謡の理論から読み解く古代歌謡の全貌』二〇一四年 三月 新典社二五九頁。「安らかにやすみになる我が大君の」と訳されている。
⑤⑧ 神野志隆光「仁徳・雄略の歌謡物語」『古事記の世界観』一九八六年六月 吉川弘文館
⑤⑨ 間瀬智代「古事記」下巻の三重の采女の物語―その記載意図の考察―『中京国文学』第一七号、一九九八年三月
⑤⑩ 金沢英之『古事記』三重の采女の歌―アメ・アヅマ・ヒナの位置づけを中心に―『万葉集研究』第三三集 二〇一二年十月 塙書房
※延喜式は『新訂増補國史大系第二十六巻 交替式・弘仁式・延喜式』一九三七年十二月 吉川弘文館による。
※遊仙窟は八木沢元『遊仙窟全講増訂版』一九七五年一月 明治書院による。
※釈日本紀は『新訂増補國史大系第八巻 釋日本紀 日本書紀私記 日本逸史』一九三二年二月 吉川弘文館による。
※冠辞考は『賀茂眞淵全集第八巻』一九七八年六月 続群書類従完成会による。
※古事記・日本書紀の本文は、『日本古典文学大系』岩波書店による。
※万葉集の本文は、講談社文庫による。
(からすだに) ともこ 日本語日本文学科